



“健苗育成”と“適期移植”で初期生育確保!

～ あわせて“初期病害虫・本田雑草防除対策”を徹底しよう!～

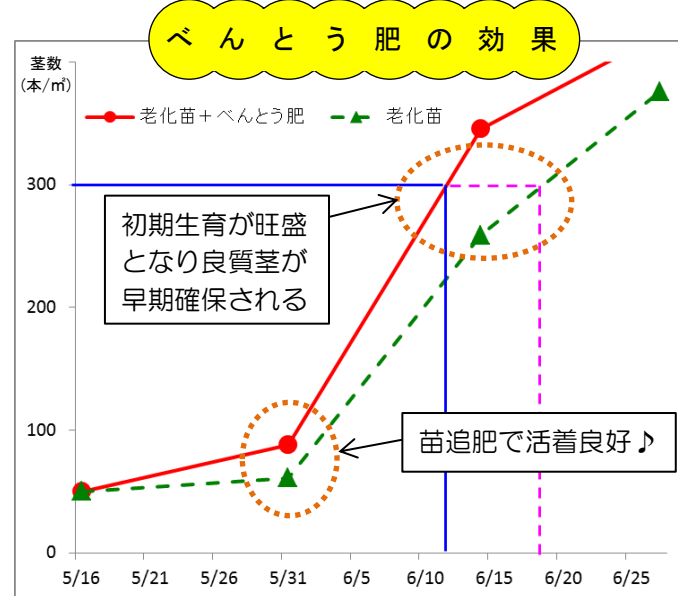
1. 移植前追肥(べんとう肥)

葉面についた肥料を洗い流すイメージでたっぷり灌水しましょう!

資材名	使用量		備考
	1箱当たり	10a当たり	
くみあい液肥2号	10g以内	200g以内	200倍以上
輸入尿素	2g以内	40g以内	10a当たり20箱以内
べんとう肥	20g以内	400g以内	

★ べんとう肥施用のポイント ★

- ① 苗の老化防止と移植後の活着を促進させるため、移植前4～5日(1.8葉期)頃に施用します。
- ② 窒素成分で1箱当たり1～2gとなるよう、肥料の溶液を散布したのち、十分散水して肥料ヤケを防ぎましょう。
- ③ 軟弱・徒長苗の場合でも、移植直前の追肥で活着・初期生育が促進されます。
- ④ プール育苗の場合は箱上まで水を張り、窒素成分で1箱当たり約1～2g相当となるよう肥料を施用し、施用後は2日間程度落水しないようにしましょう。



2. 田植え

品種ごとの特性に合わせた移植作業を行い、適正な栽植密度・植付本数・植付深さで早期に良質茎を確保しよう!

(1) 田植え時期

天候の安定する5/5以降を目安に移植作業を開始しましょう!

植え傷みによる初期生育の停滞をさけるため、天候不順日、特に“低温・強風時”の移植は避けて下さい!

(2) 栽植密度 60株/坪

- ・田植え後→3～4cmのやや深水(植え傷み回避)
- ・活着後→2～3cmのやや浅水(分けつ促進)

※ 転作あとや基盤整備あと、過剰生育が懸念されるほ場では、疎植(50株以下/坪)とする。

(3) 植付本数 3～4本/株

特に、植付本数は入れ過ぎる傾向があるので、過繁茂防止のため植付本数を確認しながら作業しよう!

(4) 植付深さ 3cm程度の浅植え

活着促進・良質茎早期確保の為、べんとう肥を施用しましょう!

3. 初期病害虫防除対策

5割減栽培では、本田で殺虫剤が使用できません。必ず育苗箱処理を実施しましょう!

資材名	適用病害虫名	使用量	使用時期
パディート箱粒剤	フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イネミズゾウムシほか	50g/箱	播種前(床土混和)、播種時、覆土前～移植当日
ツインパディート箱粒剤	いもち病、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イネミズゾウムシほか	50g/箱	

※ いもち病の常発地域、発生しやすいほ場・品種についてはツインパディート箱粒剤等を活用し、いもち病予防に努めて下さい。⇒ 初発前に防除ができます!

※ ツインパディート箱粒剤を使用した場合、パディート箱粒剤と本田防除のルーチン粒剤は使用できません。

4. 本田雑草防除対策

農業については登録内容を必ず遵守し、適切に使用しましょう! また、剤型により水深が異なるので注意が必要です!(水深スケールの活用)

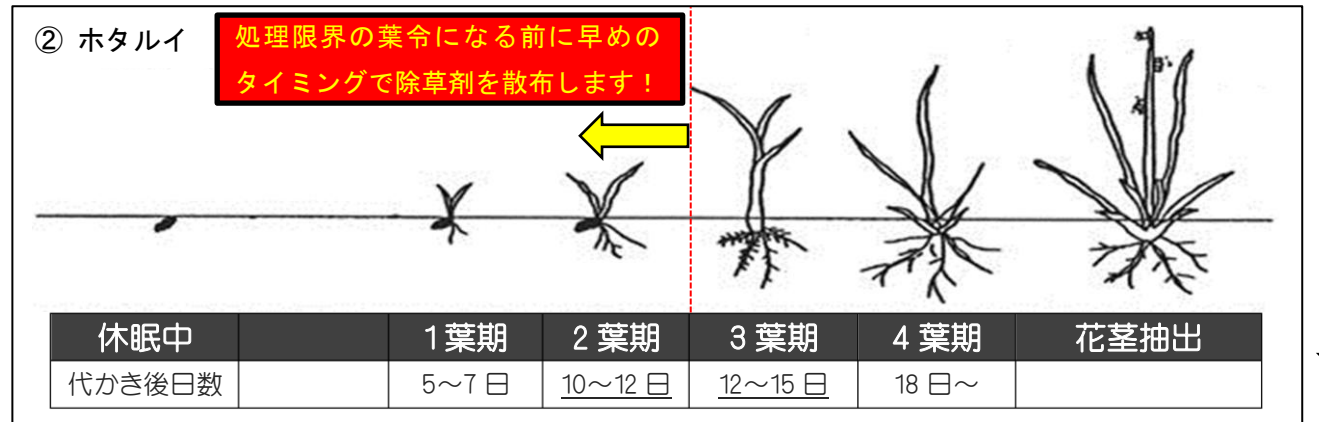
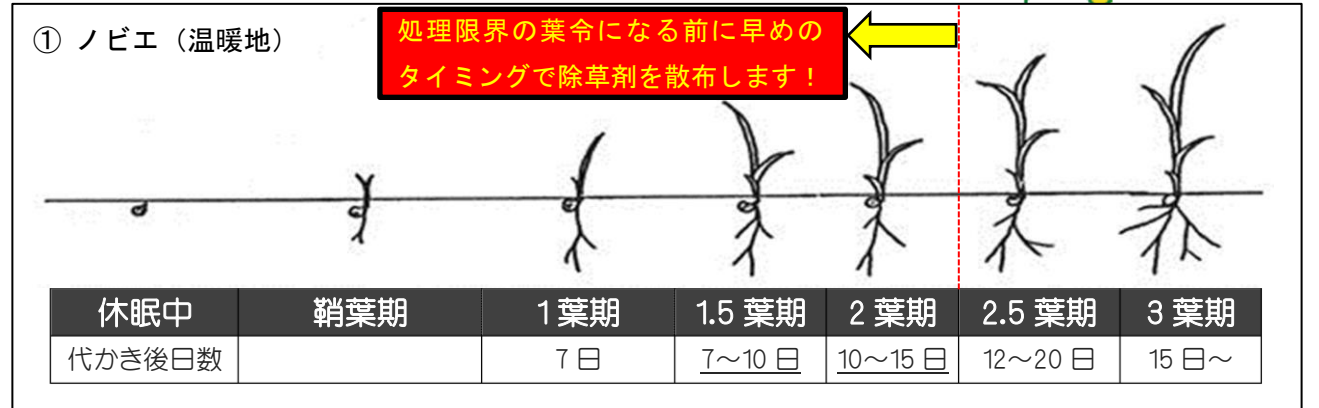
1 本田除草剤の登録内容と使用時期の確認

(1) 本田除草剤(初期剤・初中期一発剤)の登録内容

使用区分	使用資材名	使用量	使用時期	処理限界葉齢		
				ノビエ	ホタルイ	
初期処理	メテオ	1キロ粒剤	1kg/10a	植代後～移植7日前、移植時、移植直後～移植後30日まで	1葉期	発生初期
		フロアブル	500ml/10a			
初中期一発処理	ベンケイ	1キロ粒剤	1kg/10a	移植時～移植後30日まで	3.0葉期	3.0葉期
		豆つぶ250	250g/10a			
		ジャンボ	10個(250g)/10a		2.5葉期	

(2) 雑草の生育(目安)

雑草の発生は“代かき直後”から始まります!



裏面もご覧下さい

(3) 代かき後日数と本田除草剤（初期剤・初中期一発剤）の処理時期限界の目安

ノビエ (葉数)	ホタルイ (葉数)	代かき後 日数
	0.5~1.0	5
1.2~1.8	1.0~1.5	7
2.0~2.1	1.5~2.0	10
2.7~2.8	2.0~3.0	12
3.3~3.5	3.0~3.5	15
4.0~4.3	3.5~4.5	20
	4.5~5.0	25

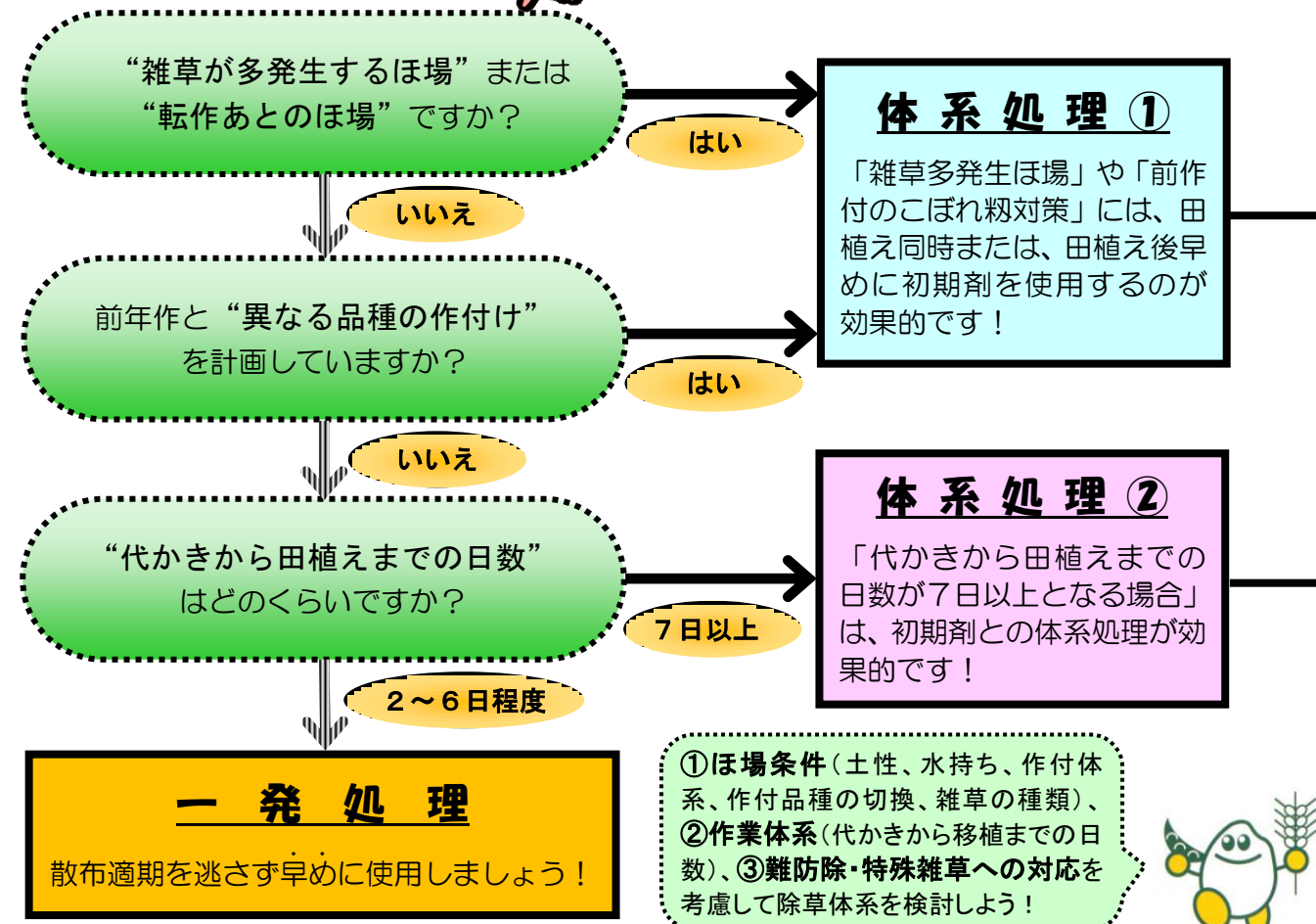
メテオ（粒剤・707P）の処理限界
ノビエ:1葉期まで ホタルイ:発生前~発生始期まで
代かき後 5日

ベンケイ（粒剤・豆つぶ・ジャンボ）の処理限界
ノビエ:2.5~3葉期まで ホタルイ:3葉期まで
代かき後 12日

雑草の生育（代かき後日数）を考慮して、早めに除草剤を使用することが重要です！



2 除草体系の検討



《難防除・特殊雑草等への対応》

- ◇ ヒエの残草、広葉、多年生の後発雑草
「初中期一発剤の適期・適正散布と合わせて、小ヒビ中干しと中干し後の飽水管理の徹底により土壌水分を維持し、除草効果の急激な低下を防ぐ」ことを基本とし、発生がみられた場合は雑草の種類・葉齢に合わせて後期剤（クリンチャー・バサグラン）による体系処理を実施する。
- ◇ 藻類、表層はく離
概ね田植え一週間頃から発生が目立ち始めます。「発生前までに初中期一発剤（ベンケイ）を散布する」ことを基本に、除草剤散布前に発生が見られた場合は、対策資材（5割減栽培：田んぼの鉄人、慣行栽培：モグトン粒剤）を使用するか夜間落水などの定期的な水更新を実施する。

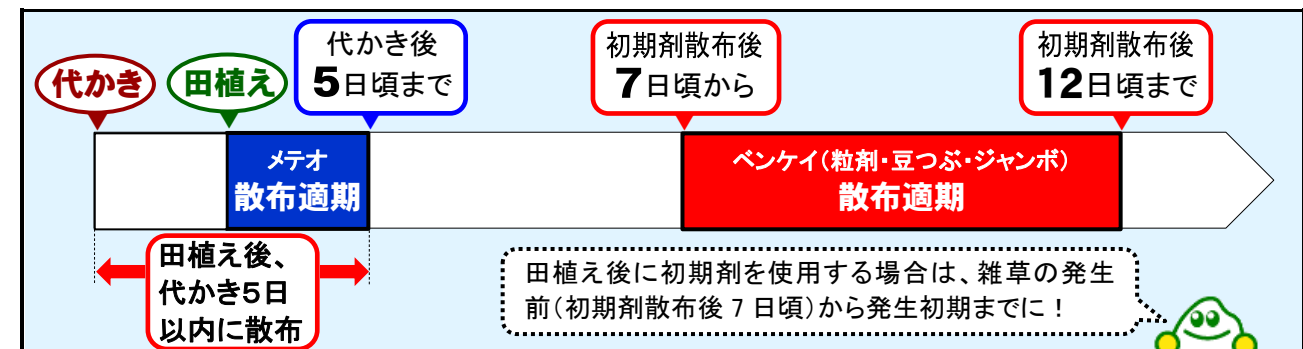
3 本田除草剤（初期剤・初中期一発剤）の散布適期の確認

「登録の範囲内のできる限り雑草の小さいうちに確実に防除します！」
→ 近年は、田植え後の高温傾向により、雑草の生育や藻類・表層はく離の発生時期が早まっています。下図を参考に、散布適期の範囲内における早め（雑草・藻類の発生前から生育初期）の除草剤使用により、雑草の発生防止に努めて下さい。

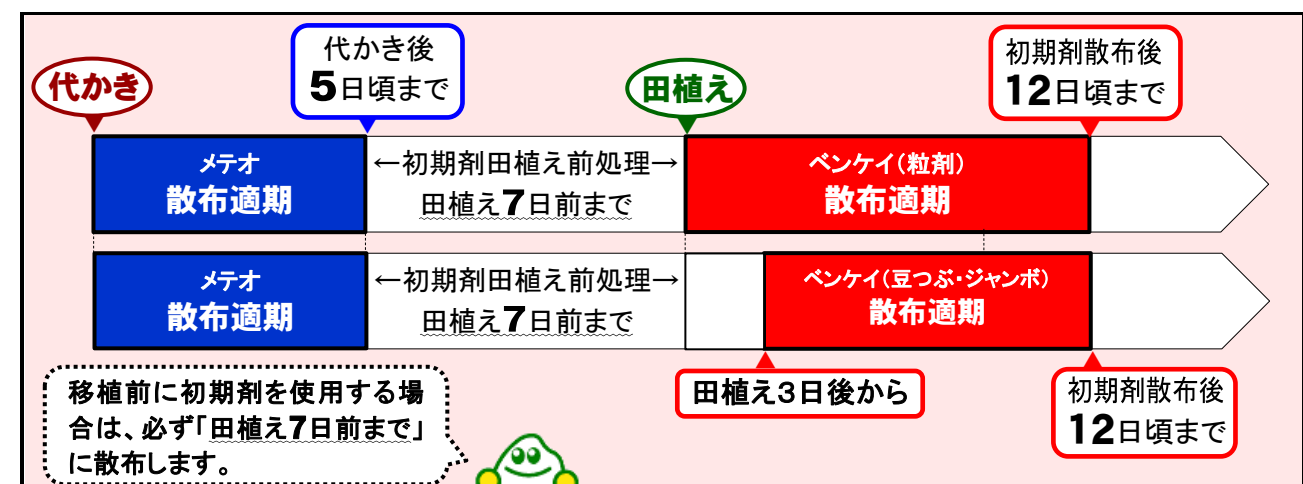
1 一発処理パターン：気象状況を考慮し、出来るだけ早めに散布しましょう！



2 体系処理パターン①：田植え後（田植え同時）に初期剤（メテオ）を使用する場合



3 体系処理パターン②：代かきから田植えまでの日数が7日以上となる場合



* 気温や水田状況（前作雑草発生状況等）によって、雑草の発生時期が異なります。発生してからでは手遅れになる場合もありますので、適期散布と適正な水管理を徹底しましょう！

～～営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ～～

次回稲作情報：4月下旬～5月上旬「田植え後の水管理、本田雑草防除、葉いもち・カメムシ対策」（予定）